



平成30年度 前橋・高崎連携事業文化財展

東国 千年の都

災害を乗り越えた先人たち —考古学からみた災害と復興の歴史—

前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

平成19年度から始まった前橋・高崎連携事業文化財展は、今年度で12回目を迎えます。この間、前橋市と高崎市が互いに協力し開催ごとに定めたテーマに合わせて、それぞれが所有する歴史的資産の一端を紹介してまいりました。

この文化財展は、前橋、高崎両市の多くの市民の皆さんに、地域で発見された埋蔵文化財や大切に保存されてきた歴史資料などを身近に感じていただく貴重な機会になっております。

今回の企画は災害考古学をテーマにしました。これまで両市域で起きた災害を先人たちがいかに乗り越えてきたのかを知っていただき、紡がれてきた両市の歴史に思いを馳せてみてください。

前橋・高崎連携事業文化財展が、前橋市と高崎市それぞれの地域の歴史を知り、その地域の特性を理解する契機となり、ひいては両市民相互の交流や連帯意識の醸成に寄与することになれば幸いです。



前橋市長
山本 龍



高崎市長
富岡 賢治

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会

協賛：上毛新聞社・朝日新聞社前橋総局／毎日新聞前橋支局／読売新聞前橋支局／産経新聞前橋支局／東京新聞前橋支局／共同通信社前橋支局
前橋通商社前橋支局／NHK前橋放送局／群馬テレビ（株）／（株）エフエム群馬／（株）ラジオ高崎／まえばしCITYエフエム（原不興）
写真：「浅間城吾妻川開川泥押絵図」（群馬県立歴史博物館提供）

第1章 火を噴く山々～発掘された火山災害～



「噴煙をあげる浅間山」

国土交通省関東地方整備局神奈川水系砂防事務所

約2万4千年前に浅間山の噴火で大規模な土石流が発生し、榛名山と赤城山との間の谷を埋め尽くしてきた台地の上に前橋市と高崎市はある。両市は言わば、災害の副産物の上に立地しているのである。現在からは到底想像もできないが、実は火山災害に深く関わっている土地なのである。その中でもこの章では、浅間・榛名の噴火によって埋もれた遺跡を中心に紹介する。短い時間で一瞬のうちに地面を覆いつくす火山災害は、当時の生活をバックし、タイムカプセルとして現在まで伝えることもある。

あさま 浅間山

大爆発!…その土石流中の岩塊(約2万4千年前)

●前橋市岩神稲荷神社の「岩神の飛石」

いわがみ とびいし

前橋市昭和町の岩神稲荷神社のご神体となっている。

浅間山の噴火で発生した土石流により運ばれた巨岩。

「岩神の飛石」▶



●高崎市街地付近の烏川中にある「聖石」

むじしし

聖石橋のすぐ下流にある。溶岩の破片が多数密着することによって形成されている。

「烏川河床の巨大岩塊 聖石」▶



1700年前(3世紀末)の噴火 ～浅間C軽石の降下～

この頃、群馬県では弥生時代が終わり古墳時代が幕開けした。県内の弥生時代人の生活に、東海・北陸地方からの人々が大量に流入してきたことが古墳時代の序章となった。



この新たな移住者は、従来の弥生集落があった丘陵地(日高遺跡)だけでなく、南部拠点地区遺跡群No.11など今まで◀南部拠点遺跡群No.11集落

開発が困難だった平野部にも進出した。また新しい首長墓として前方後方形の周溝墓を築いた。

この頃、浅間山が大噴火し多くの軽石(浅間C軽石)が降り積もった。この被害がどのような過程・規模だったのかは、まだよくわかっていない。前橋・高崎地域でも浅間C軽石に覆われた水田・畠がいくつも見ついている。

そこから災害後もめげずに耕作を続け、移住者による開発は継続され、高い塚を盛る大型古墳をつくる実力を持つまでに成長したのである。

天仁元(1108)年の大噴火 ～浅間B軽石の降下～

浅間山の史上最大規模の噴火後、被災の様子はすみやかに朝廷に報告され、時の右大臣藤原(ふじわら)宗忠は、「かつてこのようなことはなかった」と『中右記』に記している。前橋・高崎両市全域で被災状況が確認され、南部拠点地区遺跡群など、軽石などに覆われた水田跡が確認されている。また、榛名山南麓の下里見宮谷戸遺跡では、軽石などの直下の畠跡が見ついている。一



方、前橋市から伊勢崎市にまたがる史跡女堀(おんなぼり)は、被災後に畠作へと転換した畠をつぶしてまで築かれた全長13kmにおよぶ巨大な灌漑水路である。結局未完に終わるものの、災害からの復興と、災害を機に大規模な再開発を推し進める開発領主の姿がそこには窺え、この噴火は中世の始まりを告げるものであったと言える。

◀姿を現した女堀(飯土井町)

天明3(1783)年8月の噴火 ～浅間A軽石の降下～

この年の5月から始まった火山活動は、8月5日からの大爆発にともなって発生した泥流が吾妻川や利根川へと流れ込み、流域の村々を飲み込んで甚大な被害をもたらした。この災害による死者は1,500人にのぼると言われる。前橋市西部～佐波郡玉村町を潤す天狗岩用水も、利根川からの泥流が流れ込み、しばらく用水路として使用できなかった。また、泥流に埋もれた田畠を復旧させた痕跡も確認されており、大手町の前橋城では、泥流により埋もれた城の堀を耕作した水田跡が確認されている。田口町の田口下田尻遺跡では、堆積した泥流を溝状に掘り、泥流下から掘り出した耕作土を反転させて耕地を回復させる「復旧痕」が確認されている。また、柴崎町の柴崎富士塚遺跡では、降り積もった火山灰や軽石を集積して塚状に積み上げた遺構が確認されている。



泥流被害からの復旧痕(田口下田尻遺跡)



前橋城の堀に作られた水田

また、泥流に埋もれた田畠を復旧させた痕跡も確認されており、大手町の前橋城では、泥流により埋もれた城の堀を耕作した水田跡が確認されている。田口町の田口下田尻遺跡では、堆積した泥流を溝状に掘り、泥流下から掘り出した耕作土を反転させて耕地を回復させる「復旧痕」が確認されている。また、柴崎町の柴崎富士塚遺跡では、降り積もった火山灰や軽石を集積して塚状に積み上げた遺構が確認されている。

はるな 標名山

2回の大噴火

標名山の噴火を記した文字記録はないが、県内の遺跡には標名山ニツ岳の噴火の痕跡が完明に残されている。特に大規模だったのが6世紀初頭と6世紀半ばの2回の噴火である。

6世紀初頭の噴火は水蒸気爆発と火砕流を繰り返し、「標名山ニツ岳渋川テフラ(Hr-FA)」と呼ばれる火山噴出物を前橋・高崎両市一帯に降させた。

井出谷頭遺跡などでは火山灰により埋没した竪穴住居跡が見つけている他、元総社明神遺跡など多くの遺跡で水田跡が確認されている。

噴火が沈静した後、当時の人々は生活の再建を目指した

と思われる。井出谷頭遺跡や下芝天神遺跡では、Hr-FAに覆われた畠の土を入れ替えることで再び作物を植えられるように復旧を試みているが、その作業が進まないうちに泥流に襲われ復旧を断念したようである。標名山の噴火では、降下した火山灰よりも泥流による被害がより甚大であったことを物語っている。



Hr-FA埋没住居(井出谷頭遺跡)

大噴火ふたたび

6世紀初頭の噴火から半世紀ほどが経った6世紀半ば、再びニツ岳が大きく噴火する。この2回目の噴火は大量の軽石を伴う「標名山ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)」を噴出した。噴火時の風向き等により火口から北東方向への被害が顕著であり、火口に近い渋川市周辺では軽石が数m～数十mもの厚みで堆積し、また、火山灰の一部は福島県や宮城県にまで到達している。

僅かな堆積ながらもHr-FP火山灰を検出した戸田貝戸遺跡などではHr-FA下の水田と同様の「極小区画水田」が検出されている。水田内の要所に記された大畦畔が下層のHr-FA下水田と重なるようにつくられていた様子から、6世紀初頭から半世紀ほどの期間では水田のつくり方は大きく変わっていなかったことが分かる。

多くの遺跡では泥流堆積物を除去するには至っていない。旧状に復帰できないまま7世紀に入ると泥流層上面に竪穴住居がつけられる例があるなど、泥流により変化した地形を受け入れ、新たな生活の場として利用したものと考えられる。



標名山の東麓地域(比較的厚い火砕流堆積物がみられる)

第2章 大地が動く～地震災害・斜面災害の痕跡



平安時代の大地震「弘仁地震」による地割れ(内壺遺跡群)

今から1200年前の弘仁9(818)年夏頃。関東地方を震源とした大地震が発生した。いわゆる「弘仁地震」である。山が崩れ、谷が埋まり、河川は増水し、多くの人々が犠牲になった。菅原道真が編纂し、寛平4(892)年に刊行された「類聚国史」には、当時の凄惨な状況が描かれている。被災地は、相模国、武蔵国、下総国、常陸国、上野国、下野国等となっているが、特に上野地域の被害が甚大で被害状況や復旧支援が行われたことなどについて記されている。弘仁地震は、東毛地域の太田断層や大久保断層あたりを震源とした直下型の地震であり、地震の規模を示すマグニチュードは7以上と推定されている。

建物への被害

●山王廃寺

「弘仁地震」の被害は、当時最先端の構造物である寺院などにも及んだ。「定額寺」という国分寺に次ぐ寺格を与えられていた山王廃寺(総社町)でも、9世紀ごろに焼かれたと推定される瓦が多く出土している。これは、塔や金堂といった建物に置かれていた瓦が地震で壊れてしまったため、補修するために焼かれたものであろう。同様の特徴を持つ瓦の中には、「放光寺」とへらで描かれたものが出土しており、定額寺の一つである「放光寺」(山王廃寺)に供給することを明示したものと考えられる。



遺跡に残る地震の爪痕

●噴砂



菅谷遺跡群

含水砂層が、地震動によって流動化して地表面に吹き出す噴砂の痕跡が見つかっている。

●地すべり痕跡



いでみょうこうじ
井出明光寺遺跡

傾斜の強い地形でなく居住に適した地形でも大規模な地震エネルギーの影響により地すべりが発生している。



溝に入る亀裂と地層のずれ

いでつがしら
井出谷頭遺跡

埋没した溝の堆積土層が地震と推定される変動によって土層の左右でずれが生じていた。



地割れにより破壊された竪穴住居跡

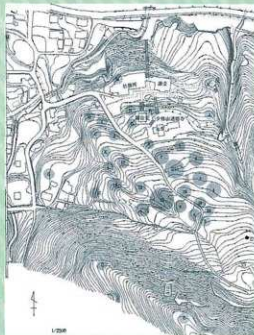
ひなだか
標高遺跡群

発生した地割れが7世紀代の竪穴住居跡を寸断し、遺構内に段差を生じさせている。地割れ発生時には住居跡はすでに埋没していたため、建物遺棄の直接の原因は地震によるものではないが、遺構と地割れの重複関係から地震の発生時期が7世紀以降であることが推測できる。

地すべりと少林山の古墳群

ほなだか
鼻高町の少林山達磨寺の裏にある**少林山台遺跡**の12号古墳に地すべりの痕跡がみられる。全長7.2mの横穴式石室は、築造時には直線的であったのが、発掘調査時には横穴式石室の**室室部分**がずれている状態であった。この付近は国土交通省の「地すべり防止区域」に指定されており、この遺跡の発掘調査も地すべり対策工事に伴うものであった。

な お昭和33(1958)年に発生した少林山地すべりでは、地層が**すべり**ごとスライドして、対岸の鼻高橋北詰付近が隆起するほどであった。



少林山台遺跡の古墳分布図▶
高崎市1999「新編高崎市史」資料編1より転載

土砂崩れ

地すべりもしくは土砂崩れで埋没した竪穴住居跡



崩壊の予兆？ 弧状の亀裂



しもたき
下滝遺跡群

しもたき いの
高崎山下滝町の井野川左岸において地すべりもしくは土砂崩れによって埋没したと思われる竪穴住居跡(5世紀後半)や、井野川方向に崩壊する予兆と思われる弧状の亀裂などが確認されている。

第3章 雨降り頻り、風吹き荒ぶ～風水害の記録

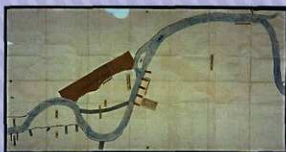
前橋城



正徳2年以降の前橋城図

江戸時代前期の第4代藩主酒井忠清さかいただきよの時代から、城の西側を南流する利根川は、前橋城の城地を大水が出るたびに浸食していったことが文献から読み取れ、頻繁に城や堤ふしんの普請ただたかを行っている。

そして、第5代藩主酒井忠孝さかいただかの代になってさらに利根川の城地浸食は進み、利根川の主流に新たな川を掘って瀬替えを実施した。しかし、この瀬替えによって城地に直接利根川の主流が突き当たることになり、更に城地の浸食を加速させることになった。



「名倉八兵衛見分の新撰絵図」

高崎城

享保7 (1722)年「御城裏川欠破損之場所御願絵図」には、前年秋の増水による被害と河道の移動が記されている。絵図では烏川が城のある東側の崖線の一部を欠失させ、碓氷川は川筋が変わって烏川との合流地点が上流に移動している様子がわかる。彩色された絵図は朱線で旧来の河道の位置を図示し、旧状復帰の普請を幕府に願い出たものである。



櫻井一雄家文書「御城裏川欠破損之場所御願絵図」



櫻井一雄家文書「御城破損之場所御願絵図」

享保12 (1727)年9月に作成された絵図「御城破損之場所御願絵図」(櫻井一雄家文書・群馬県指定重要文化財)には、同年7月の大雨による城内各所の被害が具体的に記載されている。とりわけ土居どい(土壁)や堀の崩落被害が顕著であり、申請された69件の修復箇所の内61件を土居と堀が占めている。素掘りを原則とする高崎城の堀は頻繁に破損や崩落が起きたのであろう。

堀などの被害を裏付けるように、発掘調査では堀沿いに設置された木杭の列が見つかった。また、水の管理には腐心したようで、堀の水量・水質の維持管理を目的に土層や土橋の下など城内の複数箇所には各堀をつなくあんきよ暗渠(地下水路)が設置されている。この暗渠の一部は高崎市総合保健センター/中央図書館敷地内に移築復元されており、常時見学が可能である。

二ノ丸で見つかった木杭列▶



前橋の史跡 荒砥前田遺跡

かざんざんろくせんじょうち
赤城山南麓の火山山麓扇状地の端部に位置し、縄文時代から中世までの遺物が出土しており、古墳時代・古代・中近世の遺構が確認されている。弘仁9年(818)年の大地震に伴い氾濫した荒砥川の洪水層をはさみ、上下で異なる古代の遺構が検出された。上には畠のうねまみぞ畝間溝と耕作痕跡があり、下には水田および水路が検出された。

大地震の結果引き起こされた洪水(泥流)の土砂を除去して再び水田を作るのではなく、水田から畠へ転換することによって洪水被災した耕作地を復旧したと考えられる。

岩神の堤

じんしんじびきえず
明治4(1871)年の壬申引絵図に記されており、その後も明治、大正、昭和、平成と地形図にその形をとどめてきた堤防である。このことから近世後期にまで遡り得る治水治水遺構の可能性を持っていると考えられる。

平成30(2018)年2月末の発掘調査で、堤の根石は現在の地表面から2m下の天明3(1783)年の泥流層を掘り抜き据えられていることが確認できたが、年代を推定できる資料の出土は無かった。



調査中の岩神の堤▶

県内のカスリーン台風被害を知る

昭和22(1947)年8月以来、日照りが続き農作物の干害が心配されていた。

しかし、9月9日から断続的な雨が降り、13日から本格的な雨天となった。14日から15日にかけて記録的な豪雨となり、県内はもとより関東一円に大災害をもたらした。わずか2日間に年間の3分の1近くの雨が降ったことになる。

このカスリーン台風による県内の被害は、死者592人、負傷者1,231人、行方不明者107人、家屋流失・倒壊1,936戸であった。



荒砥川の洪水「宮城村罹年の百年」(宮城村1989)

第4章 災害に備える

災害から身を守るためには、自分は大丈夫と過信したり、誰かに頼りきりになったりするのではなく、自分の命は自分で守るという意識を一人ひとりが持つことが必要である。

まずは、居住している市町村のハザードマップに目を通すことから始めてみるのはいかがでしょうか。自分が住んでいる所では、どのような災害が想定されるかを確認し、災害時にはどのような危険があるか、どのように対応するかについてあらかじめ考えておくことが、実際に災害が起きたときの判断の手助けになり、被害を抑えることにつながる。

前橋市・高崎市のHPで **ハザードマップ** | **検索**

トピック

火災発生！～焼失家屋～

しょうじつがおく

発掘調査をしていると、炭化材や焼土を多く含む、火災に遭ったと思われる堅穴住居跡(焼失家屋)が発見されることがある。残存状況が良い場合は、屋根や壁の部材が炭化した状況が確認でき、堅穴住居の構造を考える上で役立つ貴重な情報を得ることができる。

焼失家屋と認定する根拠の一つである炭化材は、木材が不完全燃焼の状態です中に埋没することで残存する。

早ばつ・蝗害 ～豊かな実りを願って～

平安時代(9世紀)に書かれた歴史書「古語拾遺」には、御歳神の祟りによりイナゴが大発生し、稲の苗を枯らせてしまったことから、ジュズダマ・山椒の実・胡桃・塩・牛の肉などを捧げ祭ったところ、苗が再び茂り豊作となった話が記載されている。

前橋市鶴が谷町の柳久保水田址で出土した土器(人物騎馬画と人物画が交互に墨で描かれたものと推定されており、そのいでたちから鬼神と考えられる。)や豚の骨などは、こうした祭りに実際に使われたと推定される。



ひだか
日高遺跡41区150号堅穴住居跡全景



鬼神と思われる絵などが描かれた墨書土器

前橋会場

入場無料

高崎会場

前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853 前橋市総社町3-11-4
TEL 027-280-6511 FAX 027-251-1700

開催日時 平成31年1月9日[水] ▶ 1月15日[火]
①午前9時 ▶ ②午後6時

場所 前橋プラザ元氣21 1F [にぎわいホール] 前橋市本町2-12-1

電話 027-210-2273 (にぎわい商業課・土日祭休み)

前橋市の文化財などについては
「前橋フィールドミュージアム」
をご覧ください。



高崎市教育委員会事務局文化財保護課
〒370-8501 高崎市高松町35-1
TEL 027-321-1292 FAX 027-328-2295

開催日時 平成31年1月19日[土] ▶ 1月28日[月]
①午前9時 ▶ ②午後6時

場所 高崎シティギャラリー 2F 第6展示室 高崎市高松町35-1

電話 027-328-5050

高崎市の文化財などについては
「高崎市HP」をご覧ください。

